源氏物語講義

源氏物語講義　おあふのあ

紅葉賀の巻　九一大段五小段三十節

此巻は葵のことを昔とかゝれたり。源氏十八歳の十月より十九歳の十月までのこと。巻の名を旧注どもよいへるめく。詞を以て名つけたるなるべし。されど巻中より紅葉賀とはぐきこゆる詞はなしば。一小段の末二節より。「ふ[illegible]のはかくつくし」とあり。旧注云。花宴巻より紅葉賀とあり。又葵のうら葉は巻より。朱雀院の行幸をとりあつめて巻の名とせり。巻のくゝるべうつほ物語より。神泉苑より紅葉ふの賀きこしめすべきとあり。又葵并の巻より花は賀とあり。又巻の賀といふ事あり。羅和は時紅梅の賀おこなはるる事あり。これらの名目を例とせるなるべし。又云。賀とは年の満ちたるを賀して。行末の宝算を祈るなり。天皇の御賀は。仁明天皇。嘉祥二年三月。興福寺大法師等奉賀。天皇満四十。これをはじめなり。太上天皇の御賀は。淳和天皇。天長二年十月。奉賀太上天皇五八之御齢也。是始なりとあり。されば此巻は十月十日あて巻をとめたり。后は女の極位なれば。葵の巻の極なるべし。源は源氏のことなり。世をうとみて。いとびしきさまなるは。源は尼となりぬるゆゑ。伏案はして。人世の業拙なるべきをあはせるなり。

段落

此巻は一大段五小段とし。一小段は於て

恵川真頼大人校定
鈴木治茂大人講義
小串重遠筆記
柳河瀬氏
藤板

巻蛮試楽をうたの心とより、朱雀院の行幸の状を叙し、二小段より花宴の上のことを叙す。三小段より大殿の状、巻蛮の中宮の御賀延の状、四小段は、源氏の宰相の中将の心、源氏の上を愛しの状なり、五小段は、源内侍のこと、七月巻蛮后より立ひ、源宰相より立ひ、源宰相の文を結びたり、

照応

一小段の第一節より、末の女はかくめでたきまつけてるたぐなるらんとあるは、相蛮の巻の冒頭に、光の雛の色をこぼちたるは、若紫の巻にて、崔の心を逃れて、源氏の第一節より、五小段の第一節より、立のつを」第二節より、立のつをうけあるつまはあるらづらは」第三節より、づつけれてあるらづらは」とあるもらは皆照応之同段第二節より夕立してなごりをーきこゆ」とありて、第三節より風ひやゝかのようちふきて」といふ夜の状の首尾を志めし照応、以他もあれども

まり御系の巻にして。源氏のさま世かけるのあるよ。を見よ会たるものを以て。御系と名づけられしこと。と。巻花の冒頭より。巻の名。御物の名乃例とは知られたり。

此巻は、朱雀院の行幸を神無月の十日あり。とかき出しは、若紫の巻。末摘花の巻より。式部卿宮の案を置たるを受けてうける文法なり。すべて巻の上巻の上のことなどをいふなり。巻の巻乃文脈をうけあるまして。源内侍の一段を。きんのあるされて興じたる事づつひと。見は帚木巻の雨夜の物語より。巻式部卿ごとくねたちの巻を楽をふくたる女をあらは。末摘花の巻より。源氏の天ぶみづうの鼻より紅梅をぬりて。平仲の次のめれ巻をつけたることの。引ごとなどを叙せるあとおれどこのきさあとはべて長き文章はいうてはかりやうのをうきさるどもをもとゝかはかくめ出しくんくんのんを使まざらむるなる。

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなりよの常つねのことなれば。

帝うへも巻つぼのうへのはぬとしくちをしのふ。

冒頭に。朱雀院の行幸の前まをさせのふ。

るれど。試楽を清涼殿前にをさせのふ。

巻のようは。花宴より行幸は。宇多門の御宴よりもとらるゝを。

朝の御門の時代より朱雀院と申は。寛平法皇の御事。彼の五十四賀を。三月の時なるを。式物語より十月紅葉の時なるべしと。

何り○神無月十月のこと。巻系宇万伎の神嘗月なるべしといふ。

説よろしきやうに○冒頭に。物うのはぬ朱雀院は禁中の外なる。

故よ。禁中の后まいうのはぬとなるらぬ○試楽のみよりる楽なり。

これ相蛮帝巻蛮より。えせのうんとして。御前にてせさせのふ。

源氏の中将。容用美しかりける海波をぞすひ弱ひける。片相手へ

は。大とのゝ改中将。容用美しかりける。人よりとなるを

立ちらびてい。ふのうさちられ深山木なり。入あ

みよ於ていとべし、

眼目

ひとのるといふこと紙ふた、全篇の眼目なるべしとは、相壹れ巻以来をぞよ者めーつれど、は巻にも何事とあ是を、注さしてえべしそれ一小段の第一節つねよりもひとるとえ之のる」四小段の第一節、なれじひとりるさ出のへれど、五小段の第七節まのひとりかおやきて」又月日のひとりの来るるうもひたるやうるを」などえ之たり、又此巻を若蓋の中なの、源と密通せしと云いく後悔志

この日のげさやこのよさーたるふよ。ごくの彩まさり。ものーおもーろき程よ。おれじ舞のあしぶこ顔持おもちち。よるよんを巻ぬさ面なるを。詠などーのへるふ。これや佛の唐迦陵頻伽のこゑるらんと。ゆゆ。おもしろくく哀なるよ。みなど涙おちーのふ。

上達部 皇子 感泣

あんじちめ。みこだちも。こるなきのびぬ。詠えて

源の袖 うちなほしのへるよ。まちとりたるがくのるぎくーしきよ。この頃源の顔の色あひまさりてたねよりもをるるとえ之。まこの女房が弘徽殿の、くめでたきいとけてい。たぐならびおぼーて。神

のふさきよりおきさし
たれど、まづ一小段め
第二節よ者のこちち
なんーのひけ。三小
段の第三節よ多のい
ろづくふ。四第六節よ
人のもれいひもるづち
いーきを」四小段の
第一節よむ。のひま
なく」四月ふよあせも
なるれて」五小段の第
七節よいとくるーと
おぼせど」などあるふ
皆眼見へ又はの上の
ことをかけるおいよづ
この巻といふこと紙を以
て眼目とあたるやう
へ是べて注さーてえ
べし、

一小ノ第二節

などそらよめでつべきこのちこのたなうえてゆーしと
のふをつこのきかへ女房なるどた。いうーしとみくと
ぢめくくる」一小段の第一節へ内裏の試楽よ。源氏も
のゆれ。大とくゆれと改めてかけるふ。小節補よりく改めて
あけるふ。おぼやけの人くより称まるるてえ。といそれたるさ
もあべーの第海波」舞のみへ。の第のこいこの深山木」を
ハめもうこぬといふたとへ。舞のうち
ようこふるへ。迦陵頻伽」佛像の況へ。妙音を奏るるもの
よーへ。ちとりたるごく」絃弾りて袖をうちて改まるを
今国よ。衛愛たる楽人ども楽を奏へ。かくめでたきよつけて
も」弘徽殿の女房。源のうつくーくおたーまへよ付ても妬このふ之。
相つぼね巻の思ふへ。神などそらよめでつべきこ之」これた
容新美麗なるへハ神よとちくるどいふ便こおぼーしのふ
さまへ。河海よ大鏡を引て。延喜の大井の行幸よ。雅明親王七歳
よて舞ハせのへるよ。源のうちの光るやうくーくるーぐちせる
ひーのバ。山神のめでくとうのことをもて書るへ
とあり。女房妬こて源を山神のめでくとあり。とんよ思のこと。

おほけなき」負けなきこと、帝と蜜通のことなくくとのこと○若のうち」若は八くらきをうあれば○おもはやおぞけたとのゐ成り」中なる若を蜜はそのまくこと帝とぎ去ること○あいなる」遠慮ナクこと若はほんの鬼ようと逆ようにいらくもるりうとてこと○あるこそ」片相手こと改中ねをいよ○けしうえあらび」ようきこと○家のこ」家柄の子といとこと○こと去うなるまいたる」大やうよぬうとうなるとしてこと○ふこの日こと」今日は試楽な

若つぼを。おほけなきこころをうまうしてのぶすて めでくこと。おぼをよ。若のこころちをん しのひとふ。若つぼをこと。あはやおぞけたとのゐ成り。帝相若よ男 そのこと去ぞくは去源ひつるときこと。若あいなうほいらくきこと。帝相 格別ようなこと。帝相 ようなりつとだりきこと。帝相 ようそ。若相 ようそ。帝相 ようそ。帝相 ようそ。帝

うゝ」清息の結尾の御ゝ甚多ゝしの
ゝ〇あらゝ人の家」青
海波ハ唐樂ゝかろし
のゝハ遥なれハ知り
難ゝ事ゝ昨日の源氏
舞のふ秋ハ表まて忘
れ〻たゝしゝのゝ〇
ゆきさゝ氏ゝのゝ
てゝかゝとゝ」ゝて后
ゝ立のゝふゝ紙のゝゝき
ゝのゝゝ〇同ゝゝまま
れて」微笑ゝ〇拍子の
やうゝゝ」大切ゝ
てゝゝのゝふゝまゝ、

一小段の第四節

初ゝまゝゝ」ゝ」より
前の秋ゝ〇かろこ
しゝ」唐の樂ハ左方
高麗の樂ハ右の方ゝ

あらゝ人の神ふるゝとゝはけれど立ゝ
てあゝれゝとゝはゝき。大ゝのゝゝよゝ
なゝめゝゝ。人のみゝ
ゝさゝ氏ゝふのゝ
やゝゝよゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝ

○こだのき　お菊の上の第二節よりみちのおけやさうぐ〜しく　とある所名〇四十人のおいしろ　上の垣代と和名ド○おほぬのやきゆる　源のまゝ海波を舞出まよ〇いとあそろしき感賞のあまり名ろしきえ〇けおされたる　源氏の容色に気圧されたるえ〇左大将　人を圧する〜源のおぎーの御の敵達をえて菊をさーあへー左大将とつそあるべー、かうやうの系図ありき人名は外まるもあり皆をわじの

人なるらひける。こだのき　お菊のおげよ。四十人のおいしろ。いひ志（海波の時のさまを）吹くしたる物の香どもよ。あひたる松風。まことのこやまおろしとゆ色てふき（ミタレ）まよひ。いろ〳〵まちりまふ木のさゝなきのまうまく海波のおぐやき出てるさまいとおそろしきやでえあ。おぎーのお菊いとうちりとき（透）てのほのまほひまけおされあるこちきれだ。おまへ（菊）なるきく試をして左大将さーのへのふ二一（小段の第四節）を菊を朱雀院へ（桜井の里のさまをぱまよこだのきお菊のおげよ）とあるふ。上の第二節よりみちのおげやさうぐ〜しく　とある地名なり。日くれあるる頃どよ。気色（けしき）だのうちち

りまえをたるえなれだなり、

小ノ第五節

空のけーきも今日のまれの日なることを去りのほとゝいふ　〇いりあや　入綾　入綾は樂の終りの手　〇小のさーるまーきさも　〇山の木の紅ふうづれたるさへ　芸は埋れ木　〇義秀殿の所さらの四のこと　義秀殿は旧注に注とも有り、四のこと　桐壺帝の御子源の第　〇秋風樂　樂の名

きぐれて。空のけーきさへえーをうほるるよさ（源のえ）るいこゝじきさそのさよ。きくのいろ〳〵うりろひ（映）えるらぬをこのざーてぐふはやまきて状況（ドウモナラヌ）くーたる。いりあやの程。そぐろさむく。世のこゝ小笑色びぐ。物〳〵しるまじ紅葉のえ人などの。紅葉のえ。山の木の紅ふうづれもれるさへ。おとーけり。義秀殿の所さらの四のこと。ずぐ（寺）ふはまそ。秋風楽ひまひのへるぎん。さーつぐ（源よつぐきてえ）のえ和なりけるこれらよおかしろさの法（盡）さ

盤渉調とあり。○とざまかうやありけん。源と四の宮との義よりて他の知らしるのらびなれるさまなり。○正三位左の上。源氏三位より正三位は叙せられしく。○正下の位。平右近将監四位上なり。正四位下より昇るふく。○うんたちめ上達部なり。三位以上の人をいふ。○むかしの上源の御世のゆうきなり。

二小の段一節

きりのひまもやいろものめく花蔵より出面もなきもやあらんと、源の思ひよけれバ。とぐよめもうけらぶ。のへりてとざ海しまやありけん。その夜源氏の中将。正三位左のゑ。平右正下のゑ。いしまふんだちめはうちとけ。源氏三位より叙せられしく。○正下の位。平右近将監四位上なり。正四位下より昇るふく。○うんたちめ上達部なり。三位以上の人をいふ。○むかしの世ゆうきなり。

『なる』一小段の第五節なり。朱雀院へ行幸の夜のさまなり。花宴を一小段とせり。桐壺帝。朱雀院へ行幸あり。源氏。平右近。四の天等の舞を叡覧あるさま。源氏三位左のゑ

の及ばぬこと、すかあるべし。人よりさきよりそなへて
してやかあるべきこと。○人よりさきは葵上
八源うひかうぶりの
時よりそなへて、御
ゆゆしうゆるんを
をこ。○おもひゆゆしうゆるんを葵の
知るべきぬ前ぶるべ
ものくもとこ。○つひ
よ云。つひよ葵のん
の身ぬれすしこと
○とかりりり。源の
格別よ思ひのつこと、
三小ノ第二節
をさきちきん八を
宮上のこと。○えつん
すみやかよ。えなんん
別のふまもさぶひて
といふこと。○むつれ

おぼゆるきぶ。人よりさきよりそなへて
しるべ。あそれよやむどなきこのこと。おもひ
ゆゆしうゆるんをもきりのそぬ思どこそあらめ。
つひよはおぼ。なほされぬとおぼ（大やうよあちこ）しく
つきたるんをたのむ
のらぬきこころの強も。おのづのら
とあのまるしかこいとたりりり。二小段の
大原よそ。源のぞ。若葵。ぞの上ちどよかづらひて。おとづ
れるぬをいひ（踏ぐ）さよ。源（第上之）葵の上のうちとけのるぬ
をすげきまふ。をさちきん八（第上之）いつ川のまく
こをを叙せり。
よいとよ死ん（ダテ容之）ぶ面このぐちまて。たるんもなく
むつれまこと。ぐしきこと正弱ふ。源色（二条院の用）ぶ。とのく

まとそ。」叙しみまつ
つりるくんこ。○なる
れたるぬ」西の第の
奥なるべし。○引用
らひよなくして」源の
為よまこと修理し
てこ。○あけくれ」朝
夕よ出入してこ。○ぐ
四のなりける時むを
め給」源を第上様そ
れと人よ知られど
とおぼしたよ、何す
もあらなして、他の女
を迎へたるやうよ
思ひこと。○まんおけ
い」政所家司ぐ家
のるを取りはふめ
れるこ。○よりとのち
正別してとりつきき
て源の人をえらびめよ

四の人こと
たれと云せじ。とおぼして。将
たるれたるんよ。ぼ云引らひよなくして。
源の事
日れもあけくれいりおくして。よろづの時を
せををしへゆ正るひて。ぬんおきていたらせ
なるど云ぐ。ぐ思なりける時むをめ給む
このまくらんやうまぞおぼ。たるまん所けい
などをそじめ。こよ日ちて。ぬもこるまら
びつのうまつこ弱ふ。これ（惟光）より思のの人
ハ。おぼつのるるくの思ひきこを正たり」。のちの
ゝこやもえきりきこを正弱ぶりりり。二小段の

〇かかりとなりてらんぶ
ゑゑ」たしなのよ物のた
らんぬとなくゑ〇おも
ぼつるなくのゑ」性
光より外の人ハ知ち
ぬさまゑ二条院の人
くの知らぬ物ゑ〇あ
のちくゑやもゑ」父
まハ兵アムの宮ゑ宮
の父兵アムもはことを
知りのゑ、

二小ノ才三節

怪とゑ〳〵思ひいで」
宮上をぎゑとど
もを思ひて乳母など
物語しのふ時ハ〇
くゑゑの」源ハ不
彼ハ思ひありきの
なよ嘆なきゑ〇いと
らゑゑ」源ハ上を甚

才二節ゑ源ハ上を人よ
れたるおんよ侍せのよ
なるいせなど
巻六小段の才四節
やのそ
小段の才十節
きもかなるべ
とよ
もドの上ゑ句を切る
で四巻のふ
りおほより
のゑ
いゑこの
巻の裏ゑ
ゑ思ひきゑ
ゑ思ひきゑ

二条院のよ
ゑ
ゑ
ゑ

やうの名の女房ハいくちもあれど、たゞ三人の女房ゝとゝてあるべし。○けさやゝ「テキハキトゝ表向きのもてなし」などいふこゝゝ。○兵アイ「兵アイ」ハ源の兄弟中上の父ゝの所兄弟中上の父ゝ。○いとよしあるさま「源兵アイをゝ人のゝ兵アイ」ハ由緒あるさまなるゝ。○好色「好色ラシク」ゝ人ゝ。○紀女「紀女」ハ源ゝ兵アイをゝ人ぎやゝと。○むつまじう「兵アイ」ハ源の父ゝ義賢の兄なれバ、むつまじう親しく源の思ひの人ゝ。○むこよなどハ「源ハ実ハ兵アイ」

源父

けさやゝ。よまてゝ。ゝ。ゝ。

きけられたりしと○
[illegible]
[illegible]
[illegible]

晦日は除服とあるえ日をえらびめるこゝもとあり○おほ山吹のちのちぎり」文いかすて色の地だけのこと○いつしかの初てなやまを色いろのまゝろ雛をかぎり付て○そ

ハきあの人り」ぼひとりごとは雛は尚ひて

ゐいひみのみさまを○三尺のこがしひとよろひ」三尺の庖厨子一具に○ちひさきを色雛を入るゆきあに○なやらふとて」追儺に十二月晦日の夜行ふえ○その追儺のまねをして遊べに○いぬ日おのこれをこばち

きなどをきの人くるさ海。いとゝ[黄昏]ものうまめの人りをこのしげなり。[源中納言]」をもとこえは。[正月一日朝拜]てうたんまゝ

ゐり給ふとて。[皇の方を]のそきまの人を。[源河]りふりハゐとをまいくなりの人りやとそうちゐさこゐ

る。いとめでたうあんぎやう[愛敬]つきの人り。[皇のこと]いゐ

しかの初ひなゐて。そくぎゐ給ふ人を。三

尺のこがしひとろひよ。まゐ[ご]まつひを色

て。まさちひさきやどもはくるをあゐめてを

りの人くるを。所せきまで。あそびをろげの人

を。なやらふとて。いぬきおこれをこばち

[傳ヘ聞レバ]」女児の[大人ハ]面をくやせこゝ地大きハ高貴の者ゐてゐ舊の子逃たり、倒の不[法ヲ]さまを[かけ]ゐ[線の]者の[馬]

いみ」て」二月一日なれバ元をつけて泣のふるとこゑ○不[せき]絵」源のさまの光とげまて。元づのひまこゑ○ひくすの中は源氏の文」ゐ[ゐ]の者ゐ[ゐ]ゐとあり馬[馬]ゑ○内よまゐらせなどして」内裡ゐ手ゐまねゐどして遊びの人こゑ○かくれをとこゐどこゐや

いけまバ。[ゆゑ]泣くろひ[修理]ゐ[ゐ]ゐるぞとそいとぶんじと[大事]おぼいとり。げよい[源有]ところゐるきゐ人の[大夫の]者ゐよも泣ゐれ。いまくろをせをべらんゐふいとい

らして。なく[泣]いゐ泣ひそ。とそおゐふゐきいと所きき[所]ゐ人ぐ[端近く出ること]にいでくこゑそまつれバ。姉[姉]ゑ人もたちいでくゐ人そまつり泣ひてひい

なのかの中は源氏のもいきこ泣くろひそくゐ。内よまゐらせなどして泣ふ。[少納言]ことゐ[ゐ]だよをこゐ。お

とをびさせの人。[皇子一才なれバ]とををよあまりぬる人い。えひなあそびいこ[せぬものの]たの人べるもの[ゐ]ゐかく泣ゐをとこな

うよつまと定れる男を設けてふとゝ源の妻なることを始ていくゝゝ○あるゝべのしゝ」俗シカツベラシウゝ○ゐくゝまゐるほどをだよ」ゐ髪あげのあひだでゐゝばとゝも若ゐ巻よあるゝ無名ゝ○あゐさは」ゐのゝ中よゐゐさそふ男をもちたゝと思ふんゝ○ゐくゝのをとことてゝ」少納言などよろゝあの夫ハ形をなどよろゝあらぬとゝ○今ぞおぼしゝりける」今までハ源の子なるどのやう想ぼしたゝまゝ○ゐ年のあのぞそふゝ」ゐふ幼な

どまうけゝてまつりのひてふあるべうゝ志めやあのよてこそゝんゝ色きらせ給ゝめゐぐゐまゐる福をだよ。よのうくきせ給ふなとお納言きこゆゐあそびよのゝゝいれゝゝ色だ。そげのうゝと思ゝそせきらんとていくゝゝ所ゝろゝ北うちよ。ふゐさは男まうけてけり。ゐくゝのをとことてあるふ。みよくゝこそあれ。ふゐかくをあしげよゝるきゝ人を源のすゝをゐゝゝゝけるゐれと今ぞおぼしゝりける。さはいくゝど。ゐゝと年のあのぞそふゝゝゝゝ。ゐくゝをさきゐけをひの。

きんゐれど男ゐちしと思ひきりのゐゐ年の約束ゝゝなゝゝ○いとうようげゐぬ」かくゝ男女の情をきちぬゝ○ゐそひぶ」副卧ゝふの方ゝとゝ、かやうよをきゝるのゝべしゝとハくゝおゐきぬとゝ、

三ホノ才一節

ゝうつくゝきゝ」葵上何とゐるくゝ隔くあるさゝゝ○よづきて」情付てゝ○あゝたゐのふゐゐんゝ色バ」葵の改ゝのさゝまのゝゝ色たゐらとゝ○ゐゐぶゝと人きゐゐてゐゝ」葵上ハ源ぶ宮を三条院へ置

ゝとふれてきるけれど。ゐくゝちゐ人くゐ。あゝ。と思ひけれど。いとようようげゐぬゐそひぶしゝなきらんとは思ゝぞりゐり』二小段の才六節ゝ。源十九歳正月の朝拝よ系内ゐのふさゝよ。宮上きんの離進をどゝのひて幼き状を叙せり。是迄を二小段とゝ、ゐ段ハ葵上為妻宮上をきゝへ叙せ源内裏より退出して左大臣為人参りすゝゝるゐり。内より大殿よりまゐるのゝゝり。何のうるゐうゝそ思ゝきゐさんゝ。ゐうゐくゝきゐ気色なくゝ。源のゐくゝけれど。源何ゝとくゝゝりだよをこゝよゐきて。あゝたゐのふゐんゝ色だ。いのようゐれゝあらんなどきゝを色のゝゝどゐきざと人をゐてゐゝつきゐふとゝきくゝ源ひゝゝりハゐゐむどゐく

て養ひのつとめのひてすりいえ○やんごとなくえらく」本書よりと源の品定めてまもるのしんとえ○まひてこゝちぬやうよ」葵ハ妻ハまちぬ新まてゆをもてなしてえ○今ゆるしびゝ葵上あまりよあたそづつもせびゝ源へはあちどまのやとえ○うちまぐゝたづすげよ」葵ハ源うと事歌の退たる恥のきさ宿まてえ○ひとのあまりうえ」源んよかくゆかるき葵なるをさゝまて、外よ

おぼゝさゞめたることそえ。葵上とんのこおのれてゆゝぐうとくえ」本書よりと源の品定めてまもるのしんとえ○まひてこゝちぬやうよ」葵ハ妻ハまちぬ新まてゆをもてなしてえ○今ゆるしびゝ葵上あまりよあたそづつもせびゝ源へはあちどまのやとえ○うちまぐゝたづすげよ」葵ハ源うと事歌の退たる恥のきさ宿まてえ○ひとのあまりうえ」源んよかくゆかるき葵なるをさゝまて、外よ

葵の上源をえおぼゝさるべゝ。北ようふえ。源のれるはけて。源のれるはけてひよゝ。ヤウソレえゝもこゝろづようゝびゝゆゝいとゝなゞうちゆゝ色のゝへるゝ。尋常の人ようりいえ。葵ハ源うとせバ四年ばかりおこれとみよおそれそれだうちまぐゝしてゆゝうゝげよ。葵ハ源うとの場されバやとうきえよごとうえ。葵の重ようえハうゝとくのほりてえ色のゝふな。源ののあまりきゝうゝのあまりぬおいものゝのゝふゞんれたてまつるぞうゝ。とおぼゝさるゝ

三小段の第一節。

二十号二

恨をらゝくことをすらんと思ひのゝえ、

三小段第二節

御ゝ大臣と葵の父ハ同ゝ大臣の中よりてゝ。御ゝ色やむごとなくゝ大臣の職よりて自ゝ上ゝ大臣の職○こゝやだゝらよ」葵上の母ハ先帝の三のまりて当代の皇妹え、かよ葵上ハ桐帝の姪え○ゝ疎なるもてなしあれバ葵上のめざまゝと思ひるえ○ならばいのゝ」ならばいのゝ源のゝえ源のゝ源のゝ源のゝ

葵上ハ年盛のさまを叙ぜり。ゝ源の紫のあまりけゝうらみられまるぞう」と心の付たとより哭こき源なれ。ゝもちまちよる。例の作者の細ゝなる行文と知べ。かく別ゝのゝさまえ。御ゝ大臣ときこゆるゝ。おぼゝ色やむごとなくおはまるゝ。こゝやだゝらよ。葵上いつきてゝゝづきはゝ。葵のおごりいとゝよるくて。ゝもおろうるをぶめざまゝと思ひきこ色のゝへるを。源えきこえ。なゝどのいとさゝゝ。何とも思ひまハぬとえいのゝ。ゝこゝろのへゝてゝとゝなるべゝ。尤大臣殿えかくゝのゝゝげなゝきゝ源のゝ源のゝ源をきこ色ひるゝ。源をまつるをゝときハ。

○おしづきいとをかしき」源のきびんをとりぬふ○名たるきぬ源おびに」まれ帯に玉帯まハめづらしきまで多し○まつろ〳〵ろ〳〵」左大臣殿推参りてまづ〳〵源のたうし

ろくさせつふ○これハ内えんなど」源今日の西まハ遅名に内宴の時に用ゐるとに内宴とハ正三月の中に清涼殿にて式入日して宴會あるを時ハ人〳〵義雅を尽ハ所に○それハ云」を時ハ又別によきぬ物ゆるに○これを

たゞ云」先ハひと通りん人の作り物ならぬふ

へとそ志ひて源よさまをせのふに○いける

のひあり」左大臣殿を

○たゆさるまそ物云

」たゞ〳〵でも源を

婿などいひて、出入させて云ハ比上なく

うれしとに、

三小ノ中三節

さんざい」年産に、系

図の事に○内まを」内

ハ相壺帝に母ハ朱

雀院に○「院」相壺帝

の母に親に花宴に一院

ハ寛平法皇に淳〳〵

〳〵とあり○移びの

ふまく」女房達源

の成人ものふまくよま

うらみもとそれて。しづきいとをかしきを

まよ。源とめて。四月二日のまれに

おびをまづ。左大臣に

ぞのぞき

ぞのたうしろもきつくろひなど。源

らぬぞ。源のよしのふいとあそれ。源

ゆえんなどいふことも侍るなる。さやうのをりよ

こそなどきこえ色のゑどそれ。大臣

りこれハたゞめなれぬ源をんとそ。

きひてさくせあてまつりのふ。源

しづきたてくこえまりあまふよいけるよひあ

りぬ源さまのよてる。かくらん人をいざいまして

うんよ。ゆえんとあらじとこえ色こう源

三小段の中二節に。

夢上のたんのけてまきさまよ。弟に左大臣殿をじめて源を

たらしと恨みまるふ状を叙せり。さて比ハ内くりをとこと

ぬぞ。ありまし」とみハ源をこして云ゑ〳〵左大臣殿の

くまハ。夢のたうあ。うハ家のおまておこしと思ひて源をこと

づきいとをかしのふさまいとあハれまかきなまれたりまハ

よいくん源ぞりいとこよをくて云」と夢上の内気質をかきた

るハ。夢先に於て。六條の内息ハとこの車

あくそひの事なるどの起らん伏案なり。さんざいまとそ

ん。あまこと不ハもありきのふび。内。吉宮。一院なるより。

さそハ殿壺のこ條のこやまぞまるりこ源る。今日

女房詞

ハまこことよハもこ色のこのな。移びおふまくに。ゆく

もくうつくしきをめであくるさまなり○これは「この」君の懐姙のことなり、去年の三月より懐姙したるひて、十二月を十月まで臨月なれど、何ともすくるをぬまばくくあやしむ○月はさりとも月ハ四月なり十月なりとも月ハ四月なり十一月よりなりのみで必ず出産あらんとくく待まるに月ハ哺花よ、陽密通ハ四月なれを三月よりするべきなりとの月説なり、さて四月よりみべきを拾遺集ニて二月十余日よりの出産あるべきなり○如のいとうづら」日注より引

きまでなりまさりぬ陽ありさまなるとく人くめでゆゆしく。君ハ陽本子のひまさりの母のうつくしふよつけてもあり母をことさげこのりりこれをとの君十二月の志をしるしてすーぶんとまきよ。月ハさりとも君ハ君去年のもとうやく人も待きこえ帝ハ母よりもさるかんまりけどもあるにつまるくてたちぬ月ハいかものくけいとやと世人もゆゆしきくぐもを。君ハやいとびしーうこのことより多のいづらよりなりぬべきことおぼーるげく

よ陽こちもいとくるーくてなやうるふ三段の第三節。陽さんざーの解よ。君妻の三条の母をとひまりの人物ハ陽ものけいけるやとあるふ君ハふ書

ふあれど月ハ引ふるも吸いぬやうに、師説ハ、花宴よ引たる拾遺集の歌とも、いとべきの歌ハ當ら月とあり、こと君の系命ぞたえ果ぬべきことと、

三ノ才四節

いとど見ひあそせて」陽ハ君の陽月の胃ハ通ぬるようてさてハ系ハ君ぬるりと見ひ系せのふ○三月ハ陽ふ三」ハ修法ハ君を巻よ陽君ハ○引ぞふ「今ハ君ふ君ふ」とあり君ハよりて改めつ、俗ふ引ぞふ君ハ○名孫ふ君ハ

よ。懐姙ハ物のけ陽ものけ君ハ陽ものけ君ハ陽よ。ものけ君ハ陽ものけ君ハ陽よ。ものけ君ハ陽ものけ君ハ陽よ。

とこの尼を弱らびてまれてて〇命なむ
もう〜」なんは比丘尼は
なうせなむとおぼせど、弘徽殿の呪詛して死ねなむ、と祈りなつるよしの口をしさよ、いのうるしてなむ
らんと思のつる〇
人まよ」人はそなるなる時かよ後へ又年なる
ふる〇まりのうまり
て」なるを源の又のひて、ぞさまを帝へ奏せんと〇むづの
げ」なの御を女房の侍へていふなるべく、
実はむつのしげなる
加よはあらびく源よよ
く似たるを恥なる

キヨハゲマシテ つりてなんやうづ〜まそそ〜づさそやうよ肥まのよ〜さいやしのひ
ける。帝へ うへのいほ〜しよ。とゆのしげよおほ〜めした
りつうのあるおを中院せんとん
ることなぎりなる。源へ よのの人きれぬはんよもいそうど
心配シテ んもとなくて。人まよまりなひて。源有 うへ此おぼ
つこなるのりゆ巫させなをまげそてまろ
りて奏〜侍らん。と巫する。むづのしげ
ムサクルシゲ
なる祖なれどとそて。らせきりめそぬもことと
ジブン
ソノワケハ 驚クバカリ
思なり。さるはいとあそ侍〜うめづらなるまで
源の容を
うつ〜とり給へるさ侍。そなべくもあらび。
鬼
なるの侍んのおのくいとくるう人のうそてまろ

〇侍んのおのよ」なよ怨
るくことあるをいふ、
旧注よ、引歌あれど引
歌よおのよそなる〇あ
やしうつるほどの
あやまち」源へ密通
したる過をそ〇別の
こそいとうきに歌ぶ
ぶりうきとそ、

三小ノ弟五草

いとうきことをつくし
なる」ど」源いつくよの
給へど〇なるのの
ひあるべきるもあらめそ
び」逢るもなるらめそ
〇今おのづの」今よ
内裡へまりのるとき
又のふべきるとそ〇
思へるるうきこのそ
よたぐなるび」源と命

タシカニ チョットシタ
るも。あやしうつるほどのあやまちを。まさよ
人のおのひとのめ〜ど。マイモカイ やさらぬそのなるきことをだ
よ。弘徽殿なるの疵をさのを世よとそ
よきそどをもとむるよ。いのなる名のつひよも
りいづべきこのと。アラン おぼつくるよ。なのこそい
ところうき。三小段の第四草。二月十日あまり。源
なるり。といふ源の侍ね王命ぬそ。源よ肖
なる志るを志あせるなり。命ぬの文よ。源侍きそ
よあひ給ひて。いそそ〜きことどもをつくしなる
ど。たなるのこのひあるべきよもあらび。源この安の
侍ことをとりなるく。ムシャウニ おぼつこのたなどりきこそを
なるば。命ぬ有 なるどこのうしもあれ。強ひて ごちなの給そそち

ぬのらん、源はあそれと思ひのつを、命婦の母源のかを思ひて表と思ふ。○まことは四十分、俗は存分のもなどいつてさん。○人づてならで源氏より若君面ありたきと。○いのさはのの道々そいのやうは前世の結びし宿縁であそこの孫世はあくの中の隅のあることそこそこの世といつは、子をかけて若やかのことをそへたり。○かくそこそこかやうのことはんはのごときとん、子もあるやうなるとのそこ。○いそそもいろいろのをを

ん。今おのづのらうんてまつらせ給ひてん。と申さるべし。思へるれきこうこうあぐなら。びこのさいらいきことなれば。ほのんキノドノナ母えのたまそでいのるらん世よ。人づてならできこえさせんとそないのふさはぞこころぐるしき。源はいのさはのむすめ。むすべる契りそこの世よあるる中のへぐでぐ。このることこそこころえぬさけれとのよ。命婦。源のことは分で思乱るこのおもひこぐれあるさはるどをこそきるよ。えたフツガウニモいしきるちゆ西びし。いひ故こあこ

命婦

きるも思ふこぬとこいのよなげくらんこやよの人のまどふてやこ。あそれ命婦よんゆるびなきことどもこのる。と思ひてきこと西りり三段の小段五節こ源若宮を系ほのぬるぐこ。おつこるこのうたきこを。命婦よ歌きのこ。命婦もいとこ思ふ我ろう。

このくのこいひやるめこをこてこうのふものこう。人のもれいひもるぐこきをこりなきこよのあまいせおぼて。命婦をも昔おぼいこりやうもうちとけむつび孫をびく人めぐりまぐくなぐこうよもてるこのよものこう。命婦のこばをこつきること母のおぼを対も

若のこそそもこ思ふこ元ぬ源はまこいのこるげくらんこやの子故よまどふこのやこるべこここ。○人のゆるびなきこ。ゆるむるなきこ。俗よ元のゆるせぬこ。

三小ノ第六節

ひぐらしこ眼目こ俗メンドウこ。ひぐらしきこここ。俗ナサケナキコトニこ。命婦をもこ。こ。こ。こ源のこるゆるこよ。命婦をもこ昔のやうこあこで。今ハうとみのふこ。人めだつまぐこ。命婦をさやうこうここのこ人や推せんここ。

引びく〜〜」俗キニクハズム〇おもひのほかなる〜〜」案外なること

四小ノ末一節

四月ハ若葉の月〇陰暦三月ハ年のほどよりいと〜〇おほきなる生長してといふこと〇あさ角〜きまで〜」きやうさむるかなで源よ似のるこ〇すさまじなきどちハ」ならびなくうつくしきこのをさなるだちハ源のをさなるきことときとおなじことと見のるこ〇いとゞうおもほゆ〜」帝甚あるべきをいとこびく〜おもひのほかなる

三小段の末六節之義やうく〜よ命ぬきをもうしろみ申さまよりさきの三小段ハ大義の義上のうけしき。

三条の宮にて。若葉降誕之事ハ当月之事叙せるなり。

までを三小段ハ大義の義上のうけしき。

四月ハ若葉降誕之事ハ当月之事叙せるなり。

よりそげのひて。やう〜起反おきこのへりなどーたまふ。あさ角〜きまでまきれどころなきさまの用つきを。おほ帝心蜜通のこと知りなるよどなりよりぬこと〜あれば。帝心なきどちハ。元巻の源よ似通ふこと。けよこのひのへるよこそ。アレとおもふ用〜けり。いとゞうおもほゆ〜づくことのぎりなし。源氏の文をこのぎりなきものとおぼめ〜なるべし。世の人のゆゑ〜いとゞいとゞすゞしかりしようもえそなきならびなるをもとめ〜ゆゑ〜ゆゑ〜ゆゑ

のるふよ付てゝゝ〇むゝ
ゝのゝひまるゝ」眼目
ゝ密通のゝ為の胸
中の安うゝぬゝ〇い
ゞきてゝゝ」帝ゝゝ
をいゞこのせてゝゝ
〇そゝをのゝ」ほをさ
しのゝゝ〇かゝる
ゝどよう」位の時か
ようゝ〇ゝひゝゝさる
ゝ」ゝゝゝぞちひのひ
てゝ〇ちひさきほど
心ゝゝ皆かゝるもの
と帝のゝゝのふゝ〇
中ゝのゝゝゝ」ゝゝ赤
面ゝゝべゝゝ心ゝ苦
ゝゝゝゝ〇ゝゝゝ
ゝゝゝ」ゝゝゝゝ
ていふゝんのゝゝゝよ
うゝゝを強くいゝゝ

よ。いゞきゝてまつゝせゝひて。みゝたち
あゝゝなれど。そゝをのゝゝんかゝるゝどよ
りあけくれゝゝ。ゝれゞゝゝひゝゝゝゝゝや
あらんいとよくゝこそおぼゝゝれちひさきほ
どゝ。ゝれかゝのゝゝゝあるゝどゝゝやあらんどゝ
いゝゞくゝゝゝゝゝと見ひきゝゝゝゝ。
ゝゝのいろゝゝゝゝちして。お
そろゝゝゝゝゝゞけなくゝゝれゝくゝゝよ
ゝゝゝゝゝ

○よそへつゝの歌なでしこの花をつゝの歌
まつもとゝて、さてこの
宮を花壺よりそへつゝ
つゝる所よ、ゐハなぐさまびしてこの色
きとのゐん○なれよ
さのゐん」引歌後撰
よ系都の塚ゆうゐ
撫子ハ花よさこのな
んよそへつゝえん」とゐ
ゐんゐを源ゐゐを
ゐのゐ、花よそへ
られて、ゐも慰やせん
と思ひ、ゐまきとゐ○
ゐらんぜさせて」命婦
源のゐゐを花よゐ
らんゐ入てゐ○神楽
るゐのゐゐを撫子

折をられぬ。命婦の矢のもとよりかき
のふことあり。
源よそへつゝくゐるよゐろハなぐさまで宮け
さまさるなでしこのゐ。それよさのゐん。と思
ひのゐゐ。このひまき世よまぐりけれぞとなり。
花の色源へ
さりぬべきひまゐやありゐんゐらんぜさせ
て。命婦有スコシバカリ
ぐちりぞゐりこの花片ヲ内返シヲかきまゐへよゐ
を系ゐ。花のゐん
ゐろゐ。ものいとあそれよ笑ゐ志
らゐ。種ジブン
神楽
ぬゐゐ。あれゆゐりとおのゐゐゐゐと

よたとゐたり、ゐハ神
のぬゐゐ縁とゐゐゐ
を思ふよりアやハりう
とむことのゐりのぬ
るゐゐぞとゐ○例の
ことゐれを」花ハ例のめ
くゐ発あゐゐすぐと
ゐ○くゐをれて」失
望のをゐ○つゐぐゐふ
したゐゐゐ」源ハ主人
そこ花を悪しと思
ひて卧のひてゐその
悪しさのやゐゐゐな
けれバゐ○到れのな
ぐさめ」源かやうゐ歌
思ふゐ、ゐる時ハ西の
花のもとのゐとゐつゐ
りて、ほゐを慰めゐ、
ハ、例のめく西の花よ
源りゐゐ、

はゐ返しとハゐきさゐるやうなゐ。命婦よろこびなぐらゐて源へ
きさしたる
まつれる。例のとゐれを。ゐゐしあじこのこと。
折をれてなぐめふしのゐる。源ウ返しの歌ゐる時むひうちさ
ゐゐ
ゐぎていゐゐじう姉しきゐゐ源ゐちぬ。法シンく
ゐゐ
づゾコくとふしたゐゐゐやゐるゐゐゐきゐちをれ。
バ。きゐのなぐさめゐゐ。ゐの方ゐ乃ゐんよりぞゐゐ
ゐのゐ。
二四小段の第二節ゐ源ゐぞしこの歌を命婦
ゐて花ゐりのゐ。花ゐりハ返しあゐる系ゐり。
源のさゐゐ
ゐどけなく
ラチモナク
桐のそけたゐゐ
ゐ丸きて卧のゐる所ゐ
ゐうちふくゐめゐのゐゐるびんぐき。あ
シャレタル
ざれゐゐうちきをぞゐて。ふえを笛ゐう

四ノ宮三節

女房ありつるふの」上よ格子のとをいくるをうけて、ふハ格子の奥よりぬれたるやうよてとく○あれぎやうこぼるゝやうて」愛らしきさ歯の溢るゝぞのりするをいと○悲しいとゝそむきのゝくる」いつもるゝ恨みこのほるゝるさまと○入ぬるいその」引奥と河よ汐ゝそばいりぬる磯のそるれやみちくもくゝるくこふらくのおほき」はさうて添をつゝるとふもくゝふるとのおほきとのゝと○みるめよ

うふきはさびつゝ。のそきのゝへれど。女房ありはるゝの奥よぬれ奥ることちして。そひぬゝのゝくるさ歯うりくしうらうゝ奥げたり。あれぎやうこぼるゝやうて。おそしなごうとくゝふらしきさ歯の溢るゝぞのりするをいと○悲しいとゝそむきのゝくる」いつもるゝ恨みこのほるゝるさまと○入ぬるいその」引奥と河よ汐ゝそばいりぬる磯のそるれやみちくもくゝるくこふらくのおほき」はさうて添をつゝるとふもくゝふるとのおほきとのゝと○みるめよ

（カハユラシゲ　スコシ　侍　ほそ　付居　調　ロ　獺　侍有）

よあくハまさるきとそよとそ。へめてハ琴とりよせて。ひまをとりてまつをすゝ。さうの琴ハ中の調そをのゝ堪ずゝ紀こそおせけれとそ。ひやうでうよ調ゝくゝて。ちらべ琴ふ。おきあそせだのりひきて。さゝ。やりのゝへれバ。えゝゝゝ。てゝ。いとうはくゝうゝおきのふ。ちひさきはを程よさゝ奥りて。ゆゝふほそはき。いとうりくしけれだ。らうたしとおぼゝて。笛ふきちらしりくをしくのふ。いとさとゝそ。うきて一ゝうゝどもを。ゝぐ一ゝうよならひとりのふ。

（細緒　堪　きれやもきこ　むづうきこと　琴ゝ十三絃ゝ　平　琴の琴の手ゝ　カハユラシ　ほそ　ほそ）

あくゝ」引奥ゝ河海よ伊勢のあまの釣なゝ夕なゝよのづくてゝふゝるめよゝ人をあくよゝゝゝ。ぞれ」そもも飽までゝたきんゝ○まさるきとゝ」ルサゴトゝ常住そひてあハるるさどぞ。みちくこふちくのみそこそよけれとゝ○えゝゝゝもそび」ふの上エウ怨ゝもそぬゝ○ちひさきは程」ふちひさきはるもそどゝのぬ程よおゝやりのふゝ○ゆゝのふ」ゆとハ左のゝを押ゝとゝ○かさきてうゝ」智得雅き調子ゝ○ゝたりゝ」只一なそて

おぼろのさらうしうをうきはこころをつくべを。
ほそ　ほそ
ほそ　ほそ　ことこのるふとおぼえ。ほそろぐせりと
いつものハ。ゐハまくけれどおもしろくふきまを
ゆ　ゆ　ゆ　

のよハさーとえ○人のうらみ云し今かくありきて人の恨おそぬやうよるゝ源氏命をすぐしてはるよりはるをゝくあひそいんのムぞとのゝふえ○ひぐらしよりゆゝりて」源氏の中膝よりゆゝりて睡のふえいと初きさ海え○こよひハいそぎなりぬ」源氏もたや今夜ハ外へ出じとのゝふえ○おもゝのなど」女房だち中膝などはなへまゐらせ

四小ノ才五節

姫夫おとゝたてまつりのひて」源氏はの睡れじ。などおもひ。せよなぎうありて。おもふさはよゝんをなりんとおもひぞ。などこゝとをゝらひきて色孫へバ。はふのゝさはそぎのよたびのうくて。とゝかゝくゝもいらくきて色あまくぞ。やぞて中ひぐらよりかゝりて。ねいりのひぬれバ。いとゝろぐるうて。こゝひいそぎなりぬ。とのゝまへバ。内侍のゝすけこれしちて。おもゝのなどこゝるあよまゐらせたる」四小段の才四節ゝ源他行を思ひとぐまりのふさまなり。けふハあ節のゝ状をゝ紙せるなり。姫夫おとゝたてまつりのひて。いぞぐなりぬ。とゝ色あまへだ。なぐさ

るを起しのひて○いとゝゝろげよきひて」中膝もゝとゝもまゐらぬ○あやふげよ」源のなほ他行しのふとはあやふむゝ。なよねのひぬゝとのゝふえ○いゝぐきたなりゝゝ」たゝひ死まる道なりゝゝもといふ俗ゝ○あれなゝん」葵方のゝ人ゝの何ゝそのゝ女ゝ侍なりゝと疑ふゝ○いとめぐききゝゝ」甚けうきめたるゝゝゝ○いまゝてそのゝ人ゝ」上簡ならぶゝれとおれもしまやうよ源よ釈ゝくふゝよゝゝらぬうておきめゝゝり。源と葵ゝもろゝよものなどまゐるいとゝゝろげよ思ひまゝびて。宝覚ゝさゝバねのひねゝと。あやふげよ思ひまゝ重ば。ほゝ。はふのゝさまゝ孫ゝゝゝくも。いゝぐきみちなりゝゝ。おゝもきぐゝく御色よまゝ。はふ上ゝゝおゝられまゝをりゝくなどゝもおはゝるを。おのづゝりきゝく人。葵方ゝゝ御用いとのまきゝ道けれバ。ゝれならんいとめぐぐきゝゝゝもあるゝれ。いまゝでその人ゝもきゝえび。さやうよまゝれゝゝゝゝれなどゝらんいあてやゝよゝんゝゝき人ゝまゝあゝゝど。内程ゝ貴ゝ内ゝゝりな

人すちんとゝ〇ものめ
めつ〜のひて」俗ギヤウサンニシテハゝ〇心なげよいそけて」心ナササウニ弱ケニテゝ
よるげといそけハ同じことゝおもことハ往来言ゝ、なよいるけ
とゝかくゝ、

四ノ男六節

いとゝほ〜」俗キノドクゝ〇ものげなるこ〜ほど」源の幼なるり去あひだゝ〇おほなる」おふるくとゝ〜ほど」懇のさゝ、俗シンセツニゝ、熱よかく去のゝるんをゝ〇さをうりのとを」をくゝものとを多別せぬ源まハある

どよて。たゝのなくこうあまひりん人をものめ
しのひて。人やとぞめんとゝくゝのなくを。
んなげよいそけてきこゆるハなどさらぬ人
くゝきこゝあへを」四小段の男五節ゝ。源ハ上を
やうのふさまゝ。げふゝ節ハ他おを見ひ
ほゝ上を深愛しのふよ帝まゝ
て。葵上あやゝ。うちよりもゝくる人ありときこ
めて。帝ハ有いとほゝく。左大臣ゝおとゝのおもひなげうるなること
とゝ。げよものげなるりほどをおほるくゝ
物しるこゝゝをさでこのりしことたどらぬ源年
どよはあゝどを。ドウシテ葵上をゝなるどのなさけなくハおてるん

三十号十三

ゆゝ〜こゝ〇うゝこまりたるさ海すて。源ハ帝の内教訓をて承去て畏りたるさ海とゝ〇ゝゆのぬ」葵を源の気よ入らぬとくきのどくくよ思ゝ〇さるハ中の女房などよみぐれるふこハなるこゝ〇いのるるものくゝ海よくくれありきて」何の隙まのさやうよ好色のこハなるぞとゝ〇ゝこゝ」稼びさせ源年をとらせのゝ〇かゝやうのうくハえまぐさせのゝび」好色の方ハ捨置のゝぬゝ〇かゝこゝろある

らん。この源ハそれど。このこまりたるさ海すて。源
いらくゝもきこゝをのるこゝぬだ。ゝゆのぬなめとゝ。帝ハ定い
とゝこゝうおほ〜めん。帝ハ何さゝ。
ちこぶれて。帝のゝそを女房ゝもあれゝゆる女房よまれ。コレカレこのる
このゝぐなど。なぐてるこゝ。ゝ上をきを
色ざめるをいのるるものくゝ海よくくれありき
てかくゝよもゝ恨こゝらるらん。このゝまいこゝ。地ゝこの
どの源こ稼びさせのひぬれど。かやうの
このゝはえよぐさせ稼ぐど。采女ゝ女蔵人ゝゝぬゝよくゝ人
などをもかゝこゝろあるをぶこゝよもゝた

原式物語講義　おぼろのお

二十五

をぞ」容色あるのハ〇とよりてをや」殊
ゑ愛しのまゝ〇ハ
あるゝやつゝ人やう
きある官女達ゝ〇
ゐてをるゝこゝゐ云
ゝ」源よハ何ゐの官女
達ゐ承諾ゐべきゝゝ
〇めるゝゝやあゝ」
源ハ何ゐの官女をゐ
又別のゝ方らんゝ
〇ゝろゝゝ」源みん
をみんとて官女とゐ
のゆよ源よゝゐれ
とゝゆいゝ〇ゐゝけ
ゐるゝらぬほどゝ」情
無くゐるゝ丁度よき
ほどよりてゐるゝ
ゝ〇ゆゝとゝゝゝ」心
実ハ何とゐ思ひゐらぬ

やゝおぼしめしてゝれだゝゝあるゝやづのゝ人ゝ
おほとのるゝゝろなゝ源ガチョットシタ。ゝりをゐるきゝとゐをゐいひよ
れゐまゝよゝはゝゐてをるゝゝとゐありゝごゝき
よゝめるゝゝゝやあらん。源いえげゝまゝぞあやフシギニゝゝゝゝ好ん
ゝゐゝざめゝゝとゝゝろみゝゐゝれゝごゝゝ
きゝゝ色ゝゐゝゝをゝなゝどゝゝるゝをゝりあれど。源ゝえなゝゝけ
ゐるゝらぬ風ゝどゝゝようちいらゝ答へてゝゝゝとゝゝハゝ
ゝれゐまゝゝぬを。まめやゝゝゝゝゝゝゝ思
ひきゝゝゆゝゝゝゐゝあり』四小段の第六節ゝ源第上を愛しのまゝゝゝの風俗ゝゝゝゐゝ
ゐれゐ色ゝゝるゝゝゝゝゝまゝゝゝ色ゝゐゝゝゝゝゝゝ前ゝ
節のゝゝきゝゝゝゝゝ比較を第上を源の寵愛しのまゝ

をゝ〇まめやゐゝさ
ゝゝ」信実ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ俗まゝ
めゝゝのゝゝらぬゝゝゝ
ゝゐゝゐゝ官女ゐゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ子地ゝ
ゝ評ゝゝゝゝ視ゝ

五ノ第一節

ゝゝゝゝゝ老ゝゝゝ色
ゝゝ源内侍のゝゝゝ
年五十七八ゐるゝゝゝ
ゝゝゝ老ゝゝゝゝゝゝ
ゝ〇あゝゝ」貴ゝ〇お
ぼゝゝゝ」上臈のゐゝ
〇ゝゝゐゝゝゝゝ」好
色の方ゝゝハ軽く愛と
ゐゝあゐゐゝを〇ゝゝゝ
ゐゝゝゝゝゝゝ」河海ゝ
の字ゝゝあゝゝ中年
をゝゝゝゝゝゝ〇にげゐく

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

也内侍今は源を似給ぬ中にも思ひ給へ〇人のもりきこえ也源はいつかくて年老たる女よ物のもの思ふ人きゝもよろしと差和のふ〇うへの内けづりぐし也帝の御髪あげよ源内侍のまゐりて手ゝてけれど〇うへはゝちきの人めして也ゝちきの人は五つ衣の袿をきる身分の人といふことみぐしをゝる人のゝゝ〇なまめきて色めきて〇いとゝゝるやうはとおゝしゝゝそなるをいとゝ〇さもゝうゝおたうも也源ゝは内侍が

なくもおもはざりけり。あさまし（源ノ心）と思ふ。なおらぬ。もの

夫遷ゑ年老たるを跡とゑ○ゆりの下ゑ引あゑ物あゝきの素のゆそおれぬれど弱もをさめ〻ゑ人もゑ」といふこのをを引て源内信自ら年老たれを愛をゑ人もなしと歌ゝをゑ○ゆりをゑ夏の」引ゑ、呼花抄よひまもなゝきげりよけりを大あらきの素こそ夏のうげハをゑ人れ」をハ内信を愛をゑ人もゑ」と歌けど、をハみまゝひまもゑゝ男のいひよるをゑとゑ○ゑ」ゝをゑの意」ハ助字ゑ源の内信あらハ、ゑとゝよりたれど、

れど。（由ヲ）をゑのらびゆりの老ゝをゝさおんぬきゝだ。ゑどゆきをゑびたゑを。ゝをゝもゝそあれ。（内信の好色のをを源笑止ヨ呆ケ）うゝてのんをゝべやとゑまれゑゑぶらゆりうゝそ夏のとゝゆめゑとゝて。をよゝれとの弱ゝもゑげゑゝ人やゝゑゑけんとゝゑきを。（内信ゑ）女ふをゑもおゑひゝらゑぞ。（テアラズ）

（内信）ゑ」ゝをゝをたゑれの弱ゝをゑりゑゑん」をゑりをきたゑ下ゑ系（ヲ）なりとゑ。といふをゑ。ゝをゑうゑめきたり。

（源）ゆゝゝとゑけばゝやとゑゑん」いつとゑゝ弱を

ゆんよをゝをゑゑんとのゝをゝ○ゆゝとゑけばの意」上の森のゆをを受てゝゑとけばとゑゝをい音立てゆゑばゝゑゑとゑゝゑゝ男のゑゑゝきゝとゑゝ源ゑ通ひゑゑば他の男れ耶魔よをゝゑゑのきゝのどくゑれゑゝとゑゑゝとのゑゑゝゑ○ゑゝらいゝゝをゝ」めんどうをゝとゝゑゝゝの苦ゝ底ゑゑ○ゑゝゑゝゑ引ゑゑ旧注の引ゑいゑゑいゝあらん、拾遺よ捨遺のかきゑゑゑゝおれひをゑあらの格柱呂ひをゑのらよゆや姫をん」と

つゝめるもりれ木ゑゝくれ。（源紅）ゑゝらゑゝいゝをゑとてゑちゑゑを。（内信源を引とゝて）ゑゝゑゝ呂ひをゝゝゑゝ（いまゝゑゝゑゝゑゝ）ゑゝゑゝ。ゑゝゑゝるゑゝゑゝのをゑゝゑ呂ひをべらゑね。今をゝらをゑゑゑ（内信はゝゝゑゝゑゝて恥ゝとゝゑゝ）れをゝゑゑんとゑ。なゝゝをゝゑゑゑゝいとゑゝゑゝゝ。（キノドクとゝ）（源紅）いまゝをゝゑん。おゑゑひをゑゝゝゑゝゑゝ。（源の）ゑゝゑゝ。引をゑをゑちゑゝゑゝゑゝ

為上は源の呂ひたるのらぞや、とのつまをうけていふ。○まくのらぬ人ゆゑ、細よりくのらぬ人のきせけるぬれきぬハいとひうくくもおもほゆるこゝを」とありこゝハぬきーき人よハぬれきぬもいとゝぬとゝ、内侍ハよぬきーき人の為ハうきあでもと形ふたぐひの人もあるれバ源とも上ハさほどよゝ伝もせぬゝ内侍ハ帝の笑のふを冒するとも呂ゝぬさまゝ○うらひ付よりり」申ねも内侍は云ゝ

ぬをを源の元通ーのハぬとゝ。さぐりけるハとゝ。帝笑のふゝ。ゝらゝたせ為まゝで。内侍は恥ゝなまくだゆけれど。まくのらぬ人ゆゑを。ぬれぎぬをぎよきまま回ーぎるあくひもあンるれだるや。いゝゝもあゝらぎひきこと迄させぞ。人ぐ（言達ゝ）もおもひの源のあるゝことのれ。とあ川のふめる。既。申ねきゝつけて。いゝらぬくはあるきこゝ。内侍のゝハ呂ひよりぬとゝ源よそ。まぐおもひ（内侍のゝをゝ）ひよらぎりけるとあもふよ。つきせぬこのみゝゝろもゝまほう（年老てやまぬぬ色のんをゝ）ぬよりれバ。のゝらひつきまゝりー五小段の第一節ゝ。源反上よそ源内侍を申めて元のふ状を叙せり。内侍のゝハ呂ぎと捧腹するまゝまわける

赤ノ牙二節

うのつまをるきゝ人の呂なぐさめ」と申ねを源の代りまゝんを忘ゝぐゝ。○のきりありける世とや」引歌ゝ河源よゝ意ーさのあぎりだよあるゝ世ゝりせバつらきをゝひてなげのさらまー」とゝを引けり、こゝハ帝ーきの限ある世ゝらぶ人のつらきをゝひて、欲のしとゝ。○うゝけゆゝを。てハ」内侍源をゝ分てハゝ。○まゝひのほど」源ハ十八九戊内侍ハ五十七八才ゝれぐゝ。○ゝぐり源ーき宵」ゝの牙三節ゝ呂ゝ。○温明

を為段の餘波ゝゝ。ゝよ呂ゝ申ねもいひゝりのひけりと結ぐゝふ。後よ源と申ねと内侍のもとゝて。為會のゝる捧腹の一段を（呂ゝ申ねゝと内侍のもとゝて。為會申ねゝより元）かき。ゝひゝべき伝説ゝ。ひゝ元人よりいいとゝとなるを。このつまをなき人の呂なぐさめよと。おもひつれど。みまほきはこのぎりありゝる世とやゝ。（ヒョンナ）そのこれ（モノスキヨ）ゝゝや。（内侍ハ申ねのゝをゝ）ゝゝゝ元のふぶ。源氏の元ハ元ゝ（中ねのゝをゝ）ゝ。ゝゝけきこゝ迄てハ。ずげゝゝゝゝゆゝをよゝひのほどいとほ（キノドク）けれど。（内侍のゝをゝ）なぐさめんとおぼせど。（源のゝよけ）ぬ物ゝきよ。いとひさゝなりよけるを。ゆふぐちして。ぐゝり源ーいき宵のまぎれよゝん。（温明）

殿内佐のまし給へ。○あのくらめ
う心よ怨もそこあ
る折のうるれば生繁
も衣れよゆゆしく○
うりはくり」は催馬
楽の山城、呂の歌、神六
の調べ山城呂のこまの
ひとうのうつくしき、
なまやらめしやさ
ぴ」なるやうつくり
き」いうよせんれい
いうよせんなりや志
なまうたつまで
まやらめしやうを
たつまで」師長なる
やらめしやさんし
や、もを皆拍子を強ふ
え、さて殿内佐のいうよせ
んいうせんと謡ふを

明殿
めいでんのうらうを。源ぞ。ありきてます。
殿内佐琵琶
殿内佐びを弾いとをのうひきゐるうぢ。ほあな
どそも。をとこ方の所あそびよまず。を生など
して。をとよまさうる人なき上なされだ。めくう
らめうう笑を迎けるをうるうぢ。あそれまきこ
ゆ。うりはくりよ姫やしるまず。と夢ハいと
をこうしてうこうふぞ。老て姫君なれだ。
白楽天別州にて女の謡をきくる文集第十五長篇あり今源主ずーのひて安実
別州
なきがくしうまあり。けんむ。れ人。のくやをこのまり
のなくりを思ひ出すの文
りんとみくとゐすりてきくるふ。源殿
いくくおもひらぶれたるけをひきり。源あづ

源のふと法耳よりう
たるふさよきり○あり
まや」上のうりつくり
よ姫君催馬楽よ
家君れまやのあま
りのるそくぎされ立
ぬれぬこの戸ひらの
せ」のまぐのひも戸ざ
しもあらぶこそこの戸
られさめやひら
いてきませられや人
つま」とあり○立ぬる
るの歌」催馬楽よ
れ立ぬれぬ、とあをう
けてまりくくてハの
へまくえ立ハあを思ひ
て立濡る人もなきよ
のくまくかくあの
ることヂヤナアとえ源
のれのふをまとよふ

源あをひくまくぬるのをくとこの今そ強ひるの
源殿のこの二段のことばを使へーん
源殿
まやいかが思びやあのようこひそよりねのくるよ。
ひらんてきませ。とうちそくくしるる。きん
女のいとくきこそよ仮会ぬとえ
たごのひたるんちぞをる。
源殿
立ぬるくく人ぞ。あらじ」あげまやようて
阿
もかくる雨そくぎこのれ。とうちなげくを。ふえ
源殿
とりしも。きくあふまずけれど。源殿を
源殿
何事をかくまでとおぼ。
源殿
人つまはあるいづふい」あげまやのまや
のあまりもなれ。とそ思ふ。とそうちをぎな
まはしけれど。ありきたるくやと思ひ
フッガウニ
アラン

あるまじきことなれど、○人つまにはの君」毛の侵てる糸よ糸やくつまとみるよりれりまや八間なくおまりハ初のことく侵りとふ何を兼たり、こゝハ人妻ハめんどうなれバあんまり別まぎらとく

五小ノ中三節

「かめだち」実法だちてく○「ものどきまする」中ゐのの好色を源の連めるふく○「つれなくて」源の表ハつらるゝなくそ、内くよ思ひのふ方多きく○これを足つけたる」中ゐハ今夜の源のさまをうそいとよきことを付ぬと

内侍の今よ侵之

ジャウダン

五小段の才二節之ダ立のなごり。「りもぐしき青。温明殿ようて。源。内侍よ遊のふ拍子。けふまづ内侍ぶ琵琶をひきて。催馬楽のうをつくるをを謡ふとかきたれど。源ハあづまやを謡ひてようねのさ馬殿之。所中ゐも。比之のいとくまめ多ちまぐくてつねよりどきこうまふぶ

拒之

ねくきをつれなくてうちくよ思びのふこと。ドウゾシテ

ぶくおほめる源。いのでうあらたきん。とのくおゐ。

ひこたるよこれをうつけくるあくちいとうけ。

嚇之

うくるをりよまそこ。ねどくきこをそくはん。源のふを

迷惑させそく

まどふくて。こりぬやといそんとおゐひそく。ゆめきこ面。風ふやいくおようちふきそ。やいふけ

ゆくほどよ。まそこくまどろむよやとこゆる乳源の

色なれだ。やをらいりたるよ。源之。入之

ソロくく入之

今本ら是二字なし是ものよりて補ふ

ねらを孫そぬこくろるれを。源氏ものおとふ付ける之。

ゆゐるとはおゐひよらびなほとそれどくをる

修理大夫

る。すりのうみよそあらん。とおばそよおと

れおとれしきんよ。源ハうの華よそ仏会ぬぬ色をを

してこうけられんとはそびうけれど。あるい

づらいいぞくんよ。くものふるまひいる

源ハうの華よそ仏会ぬぬ色をを

れ」引おへ、古今よ赤せこゞのくべき宵へさ〜ぶるのくものふるまひのぬて考る〜也」は
さをとりて、修理のそ宵くべきことゝ兼て考ることゝ為んをとゝ
○ごほ〜と」あり〜く屏風をたゝみよもる歩へ○ねびたれど年老あれど○さきさきも」内侍ハ風流よぬ色なるゝ人なれ前〜もかやうのるゆゑし
よ別〜人なれどとゝ○この矢をきゝ」語をいのよせんとん紀さよ
○ふるぬ〜」戰慄へ、内侍こゝ〜ゆゑのもとへつゞよりて差扣へし

あり法らんものを。（語ふんよ内侍のこゝをこゝぞとうゝと恨のふへ。）
（語）ぶりをとりて。屏風のうしろよへり
ぬひぬ。ゆゑを（笑へ）〜き物（コラヘテ）んゞて。〜そぬ
る屏風のもとりてゞ和〜とゝ〜みよ
せて。おどろ〜しうさるゝこのよそよ。内侍ハねびさ
れど。い〜〜よ〜ぞ〜。（甚ヤウスアリゲニ）なゝ（シナヤカ）びる人のさ和〜ゝ
うやうゝ〜。（驚くく）ごこのよそを見〜ありけれバな
らひていゝ〜ゞ〜ん（周章）あるゝ〜〜きるゝこの矢を（語をへ）
いのよ〜なゝきこゝを（アラシ）ぬるゝのゝとゝびゝきよ。
ふるぬ〜法とひゝ〜ゝ。（語ひて矢をやと見へ）れとゝられゞ

へ○かうふりゝるどう
ちゆゞめて」ゆゞむハ
四〜ゝからぬへ冠の枉
たゝ〜〜○やゝとら〜」
躊躇へ、立〜とゝ〜〜○
女あゞきみ〜」切迫し
て内侍のゝびいるゝまま
へ、○ほと〜」あやうき
ん〜俗アブナク〜○こ
のま〜〜うゝ〜」内侍の
さゝ和色ゝるゝ〜〜
くゝてゝ〜たる表面
こそ風流よゝりけ
れとゝ○五十七八」細よ
字ゝよゝむへとあり
○うちとけて物思ひ
さゝとけ」日本物思ひ
けるとあれど異本よ
さゝるけることゝよゝ〜、
内侍の年老てうちと

いでゝるぞやとおゞせど。（トリシマリナキ）ゝ志どけなゝきさそゞこよ
ゝ。かうふりゝるどうちゆゞめて。ゝ志（走）ゝらんうゝ志
ろで。おゝふよいとゝ（バカ〜シカル）をこゝなゝべ〜。とおゞ〜
やゝらん。ゆゝるいゝ（ドウゾシテ）いのでふとゝられゝ色ゝとと
おゝひて。ゝゝゝいゝ〜ゝ。たゞいゝ〜ゝいのゝれる
ゝ色ゝまゝてゝ〜。（太カ）たゝを引ぬけゝ。女あゞきゝ
みゝとむゝひて。ゝゝを（揉手へ）ゝるよ。内ゝ〜ゝゝひ
ぬゞ〜。このゝ〜ゝ〜ゝのやゞゝてゝる〜たるう
ゝべゝこそ。さゝてゝもあるゝけれ。五十七八の人のゝう
ちとけゝてゝものゝひゝゝゝゝけゝひ。（ドウモ）えゝな

けて居て今殺さるるさまの人音しとゝ〇かうあらぬさまにて中ねる系さるゝぬさはよゝ〇中〳〵ちるゝ」源ハるのゝ〳〵まゝそ中ねるとゝりのゝるゝ〇系とゝりて」源ゝ系ゝ系ちりてゝらざとおどゝるゝんと思してゝ〇〳〵ちぬきたるのひを」太刀抜きたる肱ゝ〇いとゝうつゝ」源甚痛くつめるゝ〇ねさきものゝゝ」中ねハ残念ゝるゝ〇たゝゝふれるゝ〳〵や」戯悪ゝ俗ジヤウダンニモホドガアルとゝのゝふゝ〇つとゝゝて」中

ナラヌ　ちぬ二十のゝものゝ人ぐちれば中ゝて。ものおぢしたるいとつきれ〳〵かうあらぬさまにて中〳〵ちるゝ。ひぎめて。おそろしげなるゝ〳〵をゝそれど。中〳〵ちるゝ〳〵つけのひて。系と ヤギラシ ちりてゝとゝゝゝちるゝりゝ。とをゝゝなりぬ。そのゝ人ちるゝ中ねゝるゝ。いとをゝ〳〵けれど。〳〵ちぬきたるゝひをゝとゝゝて。いとゝゝゝうつゝ孤ゝきゝば。ねゝきものゝゝ。えゝゝゝで コラヘカネテ ゝ笑ふゝ ヒゝひぬ。系ゝまゝとゝゝはゝ中ねの太刀を抜ゝハかんゝうゝゝゝ

源はきなき物と知りながらやはらかなる人なんとのたまへる衣ハ薄きの縁語

五ホノ第四節

恨ミてもの言ハ恨ミてよ浦をいひそのけのひるきてよ貝を源たゝハ立ハ時命もあらうよ二人ぶ折ろろく立のさるり来のひて引連てゆりのひゝぞ恨ミてもいつごろひなきとゝ○そゝもあらうよ引ぶゝ河原より別きてのはぞこのるゝき源川そゝもあらうよ恨ぬとゝ見べとあり立ハ源川の底もあらうよ恨まで源のゝゝ

ミクヒナキ

やゝたなき。志どけなキ なきまそぶるゝ」るされて。源の中ぶるゝ なるあのひぬ」五小段の第三節ゝ。内侍のすけとゝ源ゝゝのひて。既中ぶるゝ おどされのゝ拔ゝ。けふを作者ぶゝゝと捧腹するゝをかきたるなれど。源の節ゝ源のけゝゝゝ。けゝ作められのゝ。とあるを入れた。源そけゝとゝ穩りのひて。けゝ作ふかやうのかるゝくしき所忍びありきハ志のふぬまゝを志めせる源ゝ。ハいとゝくちをゝく。ゝけられぬるゝとなり。

ザンネンニ

とおもひふゝ。源の住のふ方ゝ。内侍をあさまゝ。ケウサメテ

ぶ返けれど。落殘ゝ。朝早ク源の方へまゝ。つとあゝゝゝてまゝれり。源の差貫ゝ。中務の君ゝ。ぬきぬ。おびな

恨内侍ゝゝもいゝふのひぞなき」たちのさゝひむきてうゝ」波のるゝりよ。そゝゝもあらハ

廿一号七

て注ゝうゝゝゝ○おもなのさゝ源やゝ面目なきゝ。源ゝりの内侍を面皮の厚きゝゝゝゝゝふゝ○あちだちゝの言上ゝ波のるゝりとあるゝを受てゝゝあち立ゝ波ハ中ぶのゝ。よせけん歳ハ内侍をさせり。ゝハ荒ゝゝ波ハさなとゝ恨中ぬど中ぶをよせゝ歳を恨むゝんとのゝ。先まで中ぶを者付ゝ。今めゝ氏不新会ゝゝゝゝ。○ゝゝ神」師云今の袖付とゝゝ不ゝ先ゝ付足ハを端袖とゝゝ○これゝゝゝゝ

ゝゝあり。海ゝなのさゝやゝとゝゝゝゝゝ。よく

けれど。内侍の中ぶの事ゝゝゝゝゝ

けさせのゝ」を假令のゝとしてのれ端袖を賜れゝゝ○この帯をえざらすーゝ」中務は端袖を取られつれバ帯だよりなくいはのまゝせんと源の思ふを○なるほどの色だのの色あるぞとハかこつけゝゝ帯の鉤といふ金具はかけたり、旧注は毛ハ僅る糸の石川のこまうとゝよ帯を取られてかちきくいはるいのなる帯をゝるぞの帯れ中ハたゝゝり」とあるを取れり、そゝて中務の帯ハ二藍なれどゝハ花田色といふゝ、六中務と内侍との中の所へ

みるどころよりこれまゐりとぞ聞けさせ給へ

とて。おーつくみゝゝおとゝせゝるゝ。いつのでとり源氏

つらん。ところゝろやゝかまし心グルシキ。このおびをえざらすーゝ。このおびをえざらすーゝ。そのいろ濃き二藍帯の色の代に帯い

ゝて。

源

なるほどの色だのぞとやおもとあやうきまゝ

ゝるぞれおびをやりておよびそやりて追付返事ふ立ゝへ。

源

ゝゝ

ゝゝとりとられぬる帯るれぞかくてゝる

色ぬるゆゝとゝろゝん。えのぞれ給へぞ。と

ゝゝ

ゝゝよよよ

女ども遣ひに立てるがちがりしゆゑなるべきなり。（源河）

のどくるれしゆゑ○引

や世の中」篠我よりハ

よの誤なるべしとある

○「この山」引歌の花

ものゆゑ犬こうこのとこ

の山なるいまや川い

さとこゝへて名ども

ちまれ」人の間とも知

ひと答てうき名流

ども流をなると口惜ゆゑ

○「いとえん」内侍

ハいとつゆ〳〵しく恨ミ

ゆゆゆゆゆゆ○「ひ」

ゆ「ひ」迷惑して紀一

のゆゆ○「さるべき折

のゆゆ」何ぞの財ゆハ

葵上ゆ内侍のゆゆ

んと源を初ゆゆ

る志りめなり。（尼目）源河

るどてあさ〳〵もあらんだち

るぞらこのへりりん人ゆゆとほ〳〵れまゆ

とはうしやゆ世の中よ。といひあゆせて。「ゆ

の山なる。と（五ゆ）うさみよくちうゆむ。さて〳〵その

後ハ。ゆゆゆれだゆゆゆゆゆゆゆゆ

るくさなひなゆゆ。いとぐものむつのゆきゆ（葵上ゆ）

葵ハむつのゆきゆ人ども口惜ゆゆゆゆ

ゆと知ゆ志らるべし。女ゆ（内侍ゆ）るほいとえん（艶ゆ）

ゆ恨ゆゆくるゆを。ゆ（源ゆ）ゆびゆゆとおゆひありきゆ

ふゆゆゆをいゆうゆとの（葵上ゆ）ゆゆ（内侍のゆゆゆゆ）いでゆゆ

ゆさるべきゆりのおどゆゆさゆゆせんとぞ

廿一号九

ゆゆんとゆゆふゆゆ

五ノ才六節

「ゆゆゆゆゆゆゆゆ」

源の中ハ兄才ゆゆる才の

教ゆたちでゆゆゆ○

関ゆてゆゆのゆゆゆ

きゆ」源をゆ「羅生門」の

うゆすきゆゆ○いと

ゆゆゆゆきゆゆ」ゆ

へるを」殊ゆゆ源をさ

けのゆゆ○ゆゆゆゆゆ

けゆれゆゆゆ」注ゆ源

ゆハゆをおきのゆ才ゆ

中ゆハ源ゆまけゆゆと

ゆゆ会のゆゆ○ゆゆ

ゆきゆと」チョットシタ

ゆゆ○「ゆゆ」挑手ゆ

○ゆゆゆの中ひとゆゆ

ゆ」ゆ中ゆ手ハ葵上

と同ゆき大きの服と

おゆひける」五小段の才五節ゆ。ゆ上ゆて源と中ゆと作

のゆゆ。ゆ。引ゆ未勘唯ゆゆを観ゆゆるゆゆ。篠我ゆハ。按ゆ六帖

巻四ゆ人ゆゆハゆゆゆゆゆゆゆゆ

〇みのどの内子と云ひとり」源は皇子といふ事ぞと〇されも知れ〜ち玉ふ」中ねの父は大臣の中にて知ぬ〇えとなるとも〇ことなら」大臣腹〇みなくこの一つのれ」大切よ人はもうやまいれてそだちたれば〇何ぞこのり云〜」源と何ほど知とる分際とも中ねは思ぬとも〇この内中どものいとこそ」源と中ねとの所中の挑み争ひは〇されどうるさくそなん」まだろれば〜たり〜きさくふとぞとも〜たりと

どの内子といふ樣にもとそあれ。中ねもれも知れど大臣ときこゆれど。源知ぬ色ことなるぞ。こそならでそ。みなくかづのれ〜るは。何ぞとり知とるべき分際とおぼえのそぬなるべし。人中ねのこそのもあるべきようぎりとくのひて。なるぐとも。あらまほしく。あらひてぞものしあやひける。この内中どものいどこそ。あやし〜（ケシカラヌ）このりしあされどうるさくてなん五小殿の中六君に。そ子姫より源と中ねとを伴じていふこ。さて此ふも内侍の給波なれど。源と中ねとの上を伴じて文を使べるは。何ぞといふ。源は皇子といふ。ぞうりよこそあれ。中ねは父も大臣の中にも知ぬ色ことなるよ。そこ上大宮

ぞうりいとこ、

五ホノ第七節

きさぞ知ぬるふ」為盗中ねよ立のつこ〇宰相よりのひぬ」源も上は三位中ねと中ねより宰相の中ねと中、三位はもこのめ〜〇みなどおりみさせのはんの」帝は儲位の内こ、内代のこりの伏案をきも〜知こ〇内うしろこ」は後こ〇内こくこの」ものの内外戚兵アムなどなれど、皆みこぞちこそといふこ〇源氏の御母やけど」源氏の摂政関白〜のふ例なること実は文使ち皇子結有この例

のこちこそこうづのれて。そあちのこだ。源こうれさのこ知とこ。ものこ思のこうや。何とこれ。いとこのこふさまを考めせるこり。

七月ばかりぞきさ知ぬ。源氏は宰相よりなりぬまひぬ。みこのどおりみさせるこん。内こ。ころ内このひちこうこりて。ぜ冷泉の中をの坊こと知ひゆ色させるこよ。内こうしろこ。先のこのべきひとおこせびに。こ。これみこぞちこそ。源氏のお母やけど考りのふ。中ぞるこ知ぬぞ。こ中をぞこようぎこきさ。為盗を中ねこ。源よ考知きこりて。内こ絵ばかりこまるものつこみこと。お母こよなんありこる。こきこでんいとぐ内こ。ころう

あれどうちまのせてハ攝政ハ為氏の卿なるべし○こまぞでんいとゞ」弘徽殿ハ為の所の「弘徽殿を妬くのゆゑとゆゑ○うらさびなきは位なり」朱雀院へは濃位のと近つけハ疑なく弘徽ハ皇太后にまりなるべしと○まづのやをこのうちゞ」弘徽殿をまづ」まてハ安堵なるべしと○まるのゆゑ」中なる入内の夜○御ゆゑ」ゆるさるべきと」后といへバ同じ后なれど、けゝ為盞の后ハ先帝の后腹の四なるゆゑ殊よ若宮をまのゆゑ」ゆゑ人くゝ

ごき孫ふことゝ思ひなり。（帝は病）されどまゝの所せいとちのくなりぬまゝば。うこぶひなきは位なり。おもほしのゞめよとぞきこえさせめひけるゝ。げよまゝの時母よゝ。（帝より仕へ始めの一年数）今余年にまりぬる女院をおきこゝまてまりてふ。（為盞を）たゝまりひぶこきことなりみ。と思んのやをこのうちゞ。世のゝ人もきこえたり」。まゝりゆゝ夜の時とゝもよ。（源氏に）宰相の云もつのうまりゝ。きこきことゝ思ゆるゆゝ。きこのゝ◎◎ひゝりゆゝやきそ。あ

ときこゝよ若ゝ仕へまつるゝ。ゝ子地の詞ゝ○まゝてひゝ為きゝムシヤウニ。源の差和がさきは人ゝ。源ハ為のしのうち」源ハ為のゝのうちをうかゝひのゝ。ぞゝ○そゝろをゝき」何とゝうゝうゝ。ゝきゝ主ゝ○つきゝゝせぬの為ゝゝろのやゝふゝとゝのゝ。と旧注よいゝるゝめし子を思ふ歌のゝをやゝとの主ゝされど恋のゝをゝゝふゝめゝるハ勿論ゝ主ハ尽モシナイゝの晴である

ぐひなきは思ひぼ思ひまゝ人ものゝたまへバ。人ゝいとゝよあゝひゝゝづきゝ思たり。（為）まゝしてひゝなきは思ゝゝろゝはゝこゝのうちゝゝおゝひやられて。ひとゞおゝびなきんちしゝゝよ。そゞろをゝ。（紀）まゝぞゝん。つきゝゝせぬゝゝろのやゝゝくゝゝれ」をゝよゝ人をゝゝまゝつけてゝ。とゝゝゝとりごゝれつ。ものいとあゝれなりみゝ。（源氏冷泉院へ）おゝまけゝまゝ月ゝよゝゝゝ

なひ〻ゝよ、光陰のくるゝことギヤナアたるあるよ及びちきゝ人をつくるよ付てゝもとゝ〇ゆゝよ生け」生長ゝ〇いとゝたてまつりつきゞゝ〻げ」ゝあゝ生長ゝるふよ者たゝのひて法とゝゑゐゐゝきゝほどよく似のよゝ〇ゆゝいとゝゝ」ゝ為ハゝあゝゆゝの法よ似るゝをんゝゝゝゝおぼゝゝ〇げよいゝるゝさ法よゝゝ」まゝゝよ源の容貌ハよゝゝきゝいゝよ作りゝのゝて法よゝとらぬゝゝちありゝさ法いゝ又おゝんゝとゝ〇月日のひゝりのゝゝ」ゝあゝの法よ似るゝ

ど。ゆゝひゝるゝ人ゝるきゝなゝりゝゝ。げよいゝゝゝさ法よつゝくりゝゝゝゝ人ゝてゝのはゝおゝゝゝぬゝゝあゝりゝさ法ハよゝいゝでゝゆゝゝ法ゝゝゝ。月日のひゝりゝゝゝのゝゝよゝゝひゝゝあゝるゝやゝゝゝゝゝぞゝよゝのゝゝゝゝおゝゝゝ』五小段の巻七節ゝ。七月為垂后よ立のひ源氏の大宰相よゝるゝのゝゝとゝを知せゝり。光迫を五小段ゝゝゝ。ゝ段をゝゝて法ゝ用位の一段ゝゝゝを。されどゝゝゝゝゝ

紅葉賀の巻終

廿一号十三

源氏物語講義

特40
148

大日本教育會書籍館
類
函 五一
架 四
號 二
冊 七
七